

## 自閉症状を示した 障害児の学校適応に関する追跡研究 V(3)

—— 自閉症状の消失した障害児について ——

加藤哲文\*・竹花正剛\*・伊藤健次\*  
打越美\*\*・竹花裕子\*\*・高杉紀久子\*\*\*  
平田菜穂美\*\*\*\*・近藤明子\*・小林重雄

われわれは過去4年間にわたって、就学前に治療教育を受けた自閉症児のうち治療過程で自閉症状が改善した児童の追跡調査を行ってきた。本報告は続く5年目の調査結果である。対象児は5名で、3名は普通学級、2名は特殊学級に在籍している。対象児の発達状況の経過及び学校適応状況を把握するために、知能検査、学力検査、チェックリストを施行し、また母親及び学級担任教師からのインタビュー、学校訪問による情報収集を行った。その結果は次のように要約される。(1)普通学級在籍児は学習面、学級適応面において不適応状態が顕在化しはじめている。(2)特殊学級在籍児は学級の指導形態に応じた学習面、学級適応面の進歩がみられた。したがって、普通学級在籍児には、今後学校・家庭における指導形態の改善が必要であり、特殊学級在籍児においては卒業後の教育との連続性を考慮した指導の必要性が指摘された。

### I はじめに

われわれは過去4年間にわたって、当研究室で就学前に治療教育を受けた自閉症児のうち治療過程で自閉症状が改善した児童の追跡調査を行ってきた(近藤他, 1979. 竹花他, 1980. 伊藤他, 1981. 伊藤他, 1983.)。今回の報告は続く5年目(対象児はすべて小学校5学年に在籍)の調査結果である。

### II 目的

前報(伊藤他, 1983.)より、普通学級在籍児には主として学習下適応が顕著となり、一方特殊学級在籍児には遅々としながらも学習、学級適応両面に進歩がみられることが指摘された。対象児は小学校高学年に入り、普通学級在籍児において

は増々学習面の問題が深刻となることが予想される。また特殊学級在籍児においては、小学校修了時に学校適応スキル(学習面や学級適応面)がどの程度進歩するかについての予測をたてる必要があると考えられる。そこで本研究では、対象児のこの1年間の変化を前報(4学年時)との比較から検討し、上述の問題点について考察を加えることを目的とする。

### III 方法

対象児の発達状況の経過、学級適応及び学習適応の状況を把握するために、知能検査(田中・ビネー式知能検査)・学力検査(教研式観点別到達度学力検査5年用。今回は、施行可能なK.Y児及びM.S児に国語と算数を行った。各検査問題は対象児の使用教科書に準拠している)・チェックリスト(T-CLAC, 小林他, 1978; T-CLLAC, 杉山他, 1981)を施行し、また母親及び学級担任教師からのインタビュー、学校訪問による情報収集を行った。調査は昭和57年12月から昭和58年2月の間に行った。

\* 心身障害学研究科

\*\* 市邨学園短期大学

\*\*\* 茨城県立コロニーあすなろ病院

\*\*\*\* 我孫子市身体障害者福祉センター

\*\*\*\*\* 土浦市立土浦小学校

\*\*\*\*\* 教育研究科

Table 1 対象児のプロフィール・訓練経過・就学状況

	症例 1 (T.M.)	症例 2 (K.Y.)	症例 3 (M.S.)	症例 4 (M.N.)	症例 5 (H.T.)
性別・生年月日	男 S46.2	男 S46.9	男 S47.3	女 S46.8	男 S46.8
主 訴	・ことばの遅れ ・落ちつきがない	・仲間に入れない ・落ちつきがない ・ことばが少ない	・ことばの遅れ ・対人関係の障害	・ことばがない ・落ちつきがない ・尖足歩行	・ことばが出ない
インテイク	S51.9 (4:9)	S51.4 (4:7)	S52.5 (5:2)	S50.6 (3:10)	S52.4 (5:8)
訓練期間	1 yr. 5 mo.	1 yr. 10 mo.	10 mo.	2 yr. 9 mo.	10 mo.
訓練経過	S51.9~S52.4 パズル, 円柱さし, 線引き S52.4~S53.2 発音, 文字読み (個別) サーキット, 電車ごっこ, 線引き (小集団)	S51.6~S53.3 書字, 数概念, 読み 絵画 (個別) 小集団学習	S52.5~S53.3 ことばの学習 (あいさつ語, 助詞), 文字, 文構成 (個別)	S50.6~S52.3 円柱さし, パズル, 絵カー ドマッチング, 発声・発語 訓練, 絵カードの命名, 動 作・音声模倣 S52.4~S53.3 色・形・大小弁別, 記憶, トレーシング, 音声と文字 のマッチング	S52.4~S53.2 発語訓練 数概念 トレーシング
訓練終了時	ひらがな, 数字の読み可 概念学習課題可 文字は書けない 飽きたり要求が通らないと 泣きや独語ができる	他者との会話が可能 課題への集中がよい 行動, 言語面で著しい進歩	個別学習に集中して取りく むことが可 基本的会話が可能 助詞の欠落, 疑問詞の理解 不可	訓練中着席可, 絵カードの 命名, 音声・文字による絵 カード弁別可 トレーシングは不完全 尖足歩行は改善されない	単語による, いくつかの会話 が可 基本的指示理解可, トレー シングは可能であるが描画はな ぐりがき 特殊学級
就 学	普通学級 (介助員なし) 4 学年より週 3 時間, こと ばの教室へ通級	普通学級 (担任に障害や就 学前に指導を受けていたこ とを知らせていない)	普通学級 週 2 時間, 情緒障害学級に 通級	部分的に普通学級への参加	部分的に普通学級への参加
知能検査	S53.7 : I Q 58 * S58.2 : I Q 63 *	S54.9 : I Q 100 * S58.2 : I Q 83 *	S54.9 : I Q 135 * S58.2 : I Q 113 *	S53.7 : I Q 59 ** S58.2 : I Q 17 *	S53.7 : I Q 38 ** S58.2 : I Q 29 *

\* 田中・ビネー知能検査  
\*\* 大脳式知能検査

IV 対象児

対象児 (イニシャルは前報と同一である) のプロフィール・訓練経過・就学状況は Table 1 に要約した。生育歴及び就学後の経過の詳細は既報の通りである (近藤他, 1979; 伊藤他, 1981)。

V 結果

対象児の 5 学年時の調査結果 (知能検査, 学力検査, チェックリスト, 学級適応等) を以下に示す。

(1) 症例 1 (T.M 児)

田中・ビネー検査の結果, MA が 7 歳 (IQ63)

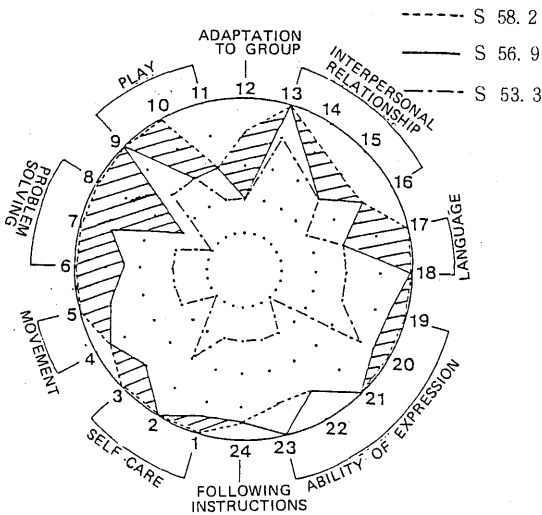


Fig. 1-1 症例 1 (T.M) T-CLAC

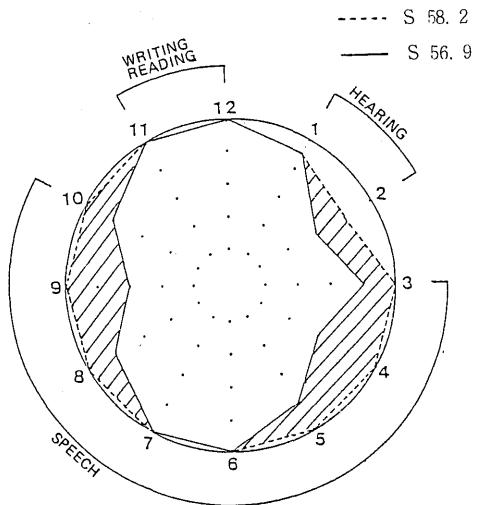


Fig. 1-2 症例 1 (T.M) T-CLLBC

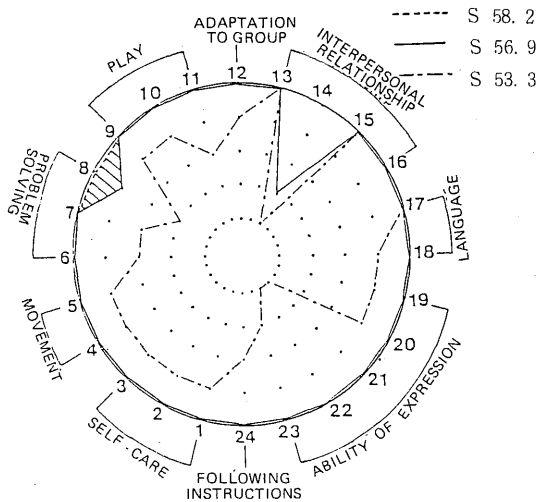


Fig. 2-1 症例2 (K.Y) T-CLAC

であった。就学時の同検査のIQは58であった。学力検査は遂行不可能と見なし施行しなかった。またT-CLAC及びT-CLLBCの結果 (Fig. 1-1, 1-2) から、「同年齢の子どもの遊び」、「大集団 (学級) での指示理解」、「絵画表現力」に遅れがみられるが、他の領域は本チェックリストの上限にはほぼ達している。学校においては、週3回 (各1時間) ことばの教室に通級しているが、今年度は担任の指導方針の変更があり、教科学習指導は行われなくなった。そして対人関係の改善を目標とした運動や遊びの指導が行われている。その結果、担任教師をはじめ他の教師や同年齢の子ども達に対する本児からのかかわりが認められるようになったと報告されている。一方、普通学級では体育・家庭科・音楽といった教科においては授業に参加できるものもあるが、他の教科については形式的参加にとどまっている。したがって、これらの授業時には離席やその他の不適応行動がみられた。また「普通学級」と「ことばの教室」との連絡はあまりとられていない。

(2) 症例2 (K.Y 児)

田中・ビネー検査の結果、MA 9歳8か月 (IQ83) であった。就学時の同検査のIQは100であった。また前報から行っている教研式学力検査は、国語・算数ともに「達成が不十分」なレベルであり、特に理解力を必要とする項目に落ち込みがあった。4学年時の (前報) の算数の結果は、技能項目が「おおむね達成」の他は、すべて「達

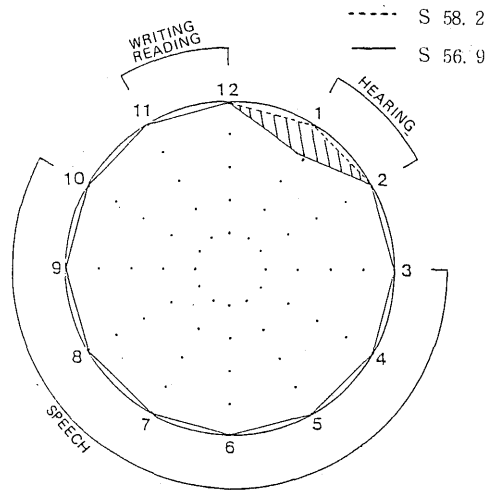


Fig. 2-2 症例2 (K.Y) T-CLLBC

成が不十分」なレベルであった。T-CLAC及びT-CLLBCの結果は、T-CLACの兄弟関係の項目を除いていずれも上限に達している (Fig. 2-1, 2-2)。学校では普通学級に所属しており、担任には本児の障害や過去に治療教育を受けたことを知らせていない。したがって学級適応に関する情報は母親より得たものである。それによると、全般的に本児の学力はクラス (38名) で下位であるが最下位ではない。苦手な教科は算数 (図形、単位、分数、文章題等) や国語 (文章理解) であるが、時々算数などで80点や90点を取ることがある。また注意散漫による漢字の書きとりミスがある。その他、運動 (器械体操) が不得意であり練習を回避する傾向がある。学級生活は、友人関係が比較的良いが積極的な会話は少ない。クラブ (コーラス部) や水泳教室にも積極的に参加している。家庭では兄 (自閉症児であり、本児に対して攻撃行動がみられる) に対する回避傾向が顕著である (Fig. 2-1)。

(3) 症例3 (M.S 児)

田中・ビネー検査の結果、MA 12歳6か月 (IQ113) であった。また就学時の同検査のIQは135であった。教研式学力検査の結果は、国語・算数ともに「十分に達成」のレベルであった。また、前報 (4学年時) の同学力検査の結果も「十分に達成」のレベルであった。T-CLACの結果は、「大人や同年齢の子どもの遊び」が消極的であり、自分から他者の中に入っていないことを示してい

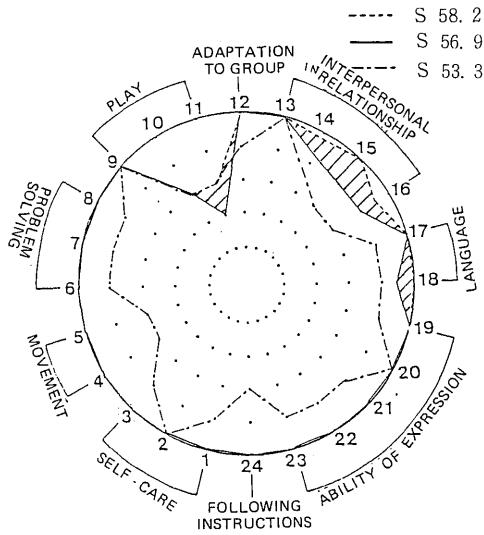


Fig. 3-1 症例3 (M.S) T-CLAC

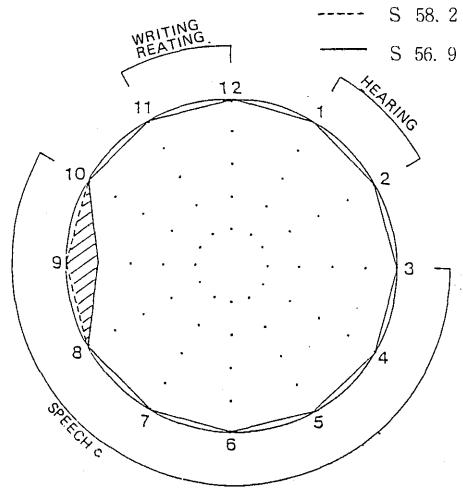


Fig. 3-2 症例3 (M.S) T-CLLBAC

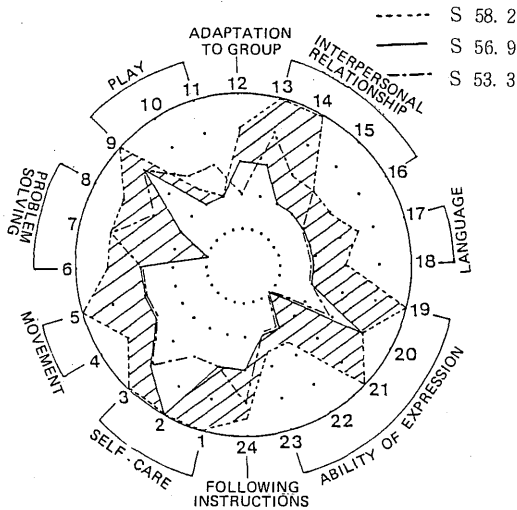


Fig. 4-1 症例4 (M.N) T-CLAC

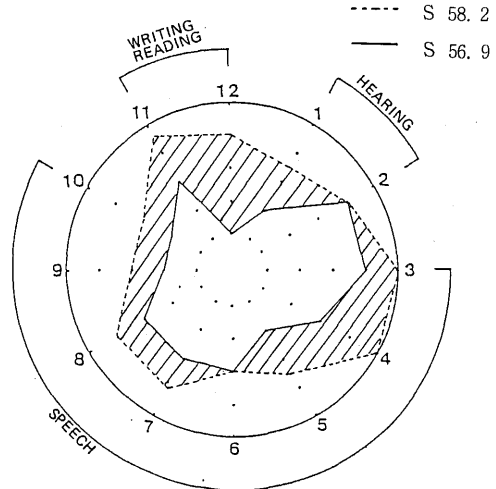


Fig. 4-2 症例4 (M.N) T-CLLBAC

る。他の項目及び T-CLLBAC の全項目は上限に達している (Fig. 3-1, 3-2)。学校では普通学級に所属し情緒障害学級に週 2 時間通級している。普通学級においては、国・算・理・社といった教科領域で常にクラスの上位にあり、特に社会科での学習の積極性が認められている。しかし、音楽、図工、体育、家庭科といった技能教科は苦手であり、技術的にも不器用である。学級適応は T-CLAC に示されるように他児との交流がほとんどなくクラス内で孤立する傾向にある (Fig. 3

-1)。しかし、今年度から掃除、新聞委員の活動に参加するようになり消極的ながら役割意識を持つようになった。また、クラス内不適応行動として、勝手に答を言って授業を乱す、授業中の離席等があり、クラスのルールに従えないことが多い。情緒障害学級では主に体育指導、他児とのルール学習を行っているが、特に体育は不器用ながら参加態度に向上がみられ、勝敗への意識も高まってきている。

(4) 症例 4 (M. N 児)

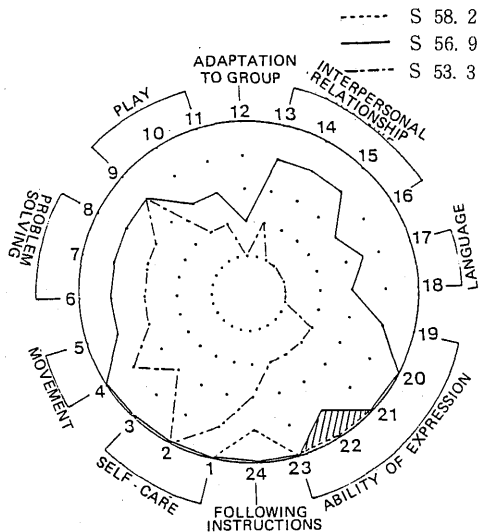


Fig. 5-1 症例5 (H.T) T-CLAC

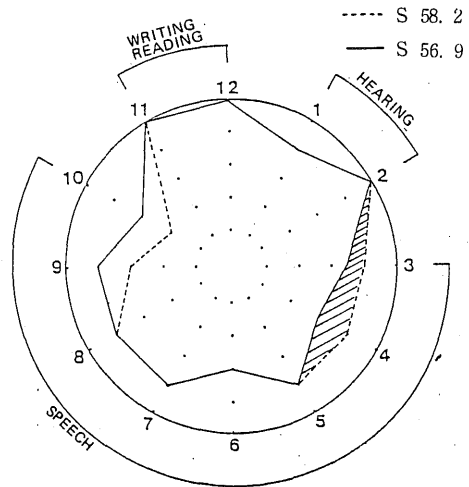


Fig. 5-2 症例5 (H.T) T-CLLBC

今回初めて田中・ビネー検査を行ったが、結果はMA 2歳 (IQ 17)であった。この検査項目のうち2歳台の動作性項目、簡単な物の命名は遂行可能であったが、その他の言語性項目は不可能であった。就学時に大脳式知能検査 (動作性検査) を施行したが結果はIQ 59であった。T-CLACの結果をみると「遊び (大人や同年齢児)」や「描画能力」に遅れがみられる。また身辺自立及び家族との相互作用はほぼ確立したと言える (Fig. 4-1)。T-CLLBCの結果をみると、「指示理解」において、「基本的指示」が小集団内でも理解可能となっている。また「読字」、「書字 (ひらがな)」も著しい改善を示している。最近では漢字まじりの文書も読めるものがでてきた。一方、「表出言語」は発声レパトリーの増大、構音の改善がみられるものの、単語レベルにとどまっており、エコラリア、その他の独語以外は自発頻度が低い。「受け答え」も単語が主となっている (Fig. 4-2)。学校は特殊学級 (19名の児童を3クラスに分けて3名の教師が担当。各教師は、1週間交替で各クラスを巡回している) が中心であり、小集団の指導形態で文字や数概念の指導が行われてきた。その結果、ひらがなの書きとり、自分の名前を書き、漢字を含む3~4語文の読み、5までの数字と量の対応などが可能となった。しかし、体育は尖足歩行が改善されないことから、走る・飛び上る等の

運動が苦手である。普通学級への参加は、朝会、掃除、クラブ等で可能であるが、他児への働きかけはなく受動的な参加となっている。しかし、他児からの働きかけに対する回避反応がなくなり、呼びかけに対して接近することが可能となった。特殊学級ではクラスのルール (号令をかける、給食当番、着席) に従うことが可能となった。問題行動としては、時間への固執 (予定した時間が変更になるとパニック)、洗済・歯みがき粉・スプレーへのこだわりがある。特に登下校時に他人の家に入って洗済等を持って来ることがこの1年間でしばしばみられ、現在母親が登下校時に付き添っている。

(5)症例5 (H. T 児)

田中・ビネー検査の結果、MA 3歳5か月 (IQ 29)であった。就学時の知能検査の結果 (大脳式知能検査)はIQ 38であった。T-CLACの結果は、「集団適応」、「他者 (大人や子ども) との遊び」において自発性がみられず、常に受動的であることを示している。しかし、特定場面での対人関係は、本人のペースに合わせれば相互作用が可能である (Fig. 5-1)。T-CLLBCの結果をみると、上限に達している項目は「指示理解」、「読字」、「書字 (ひらがなと漢字少し)」である。しかし、一般的な会話能力に関しては特定の人の間で単語レベルでの受け答えにとどまっている (Fig. 5-2)。

学習面では数の基礎的概念(10までの加法, 数と具体物の対応など)の理解が可能である。その他, 月・日・曜日・時間の呼称が可能である。「表現能力」は, 文字(ひらがな)は一応書くことができるが, 描画はごく初歩的な人物画などが可能であるレベルにとどまっている。運動は, 走る・飛び上る・投げる等の基本動作は可能であるが短時間しか持続しない。普通学級への参加は, 体育, 給食, 掃除, 朝会等で可能である。クラスの中でも, 教師の言語指示でどうにか他児と同様の活動が可能となってきた。特殊学級では出欠や保健カードの係になっており, 他児の呼名やカードを職員室へ届ける等の役割をうまくこなしている。また今年度から普通児と集団登校が可能となり, 母親の付き添いが必要なくなった。

## VI 考察

以上, 対象児の5学年時の学校適応状況を述べた。次に前報(伊藤他, 1983. 対象児は4学年)の結果と比較しながら次の3点について考察を進める。(1)普通学級在籍児の学習面を中心とする学校適応上の問題点。(2)特殊学級在籍児の学校適応上の問題点。(3)この1年間の対象児の変容経過による小学校卒業時の予測。

### (1)普通学級在籍児の問題点

普通学級在籍児は T. M, K. Y, M. S の3名である。まず T-CLAC 及び T-CLLBAC のこの1年間の変化(Fig. 1-1~5-2の斜線部分)をみると, K. Y と M. S についてはほとんど変化がない。K. Y には「兄弟関係」, M. S には「他者との遊び」や「対人関係」の問題が固定化してきている。一方, T. M は「言語」や「知的課題解決能力」の進歩がみられた(Fig. 1-1~3-2)。次に知能検査の結果(Table 1)をみると, T. M は IQ 63 であり, 就学時とほとんど変化がない。知的な面から考えると, 普通学級5年時の教科学習に参加するには無理があろう。また K. Y においては IQ 83 と, 就学時よりいく分低下傾向にある。前報から指摘されているように, 「文章理解」や「類推能力」を必要とする教科において落ち込みが見だっており, 今年度は明らかに「underachievement」な状態にあると言えよう。一方, M. S はアカデミックな教科においては平均以上のレベルを示し何らかの的に問題はみられないが, 技能教科では他児につ

いていけない面が多く, 学習面のアンバランスが大きな問題となってきた。学級の指導形態をみると, T. M は「ことばの教室」への部分的通級, K. Y は「普通学級」のみ, M. S は「情緒障害学級」の部分的通級となっている。T. M の「ことばの教室」での指導は, 運動や遊びに限定されており, 教科学習における本児の遅れを改善する場がない。したがって普通学級では「お客さん」的存在であり, 授業に参加できるものとしては技能教科の一部にとどまっている。この結果, 授業中に不適応行動(離席)が増加している。K. Y は結果の項で述べたように, 学習面で不適応状態が顕在化し始めている。しかし学級生活では対人関係や学級活動等を中心として比較的良好であると言えよう。M. S の問題点は普通学級における孤立化傾向であると言える。この傾向は前報からも指摘されてきている。対人関係を中心とした社会性の欠陥は家庭における養育に負う点も多く, 現状では増々問題点が大きくなる可能性がある。

### (2)特殊学級在籍児の問題点

特殊学級在籍児は M. N と H. T の2名である。まず T-CLAC と T-CLLBAC からこの1年間の変化をみると, M. N は「対人関係」や「課題解決」に大きな進歩が認められた。また言語領域においても「指示理解」, 「発音」, 「読字」, 「書字」で大きな進歩が認められた。今後, 改善が望まれる領域として「表現能力」, 「遊びを媒介とした対人関係」, 「機能的表出言語」などがあげられよう。また H. T はこの1年間にほとんど変化がみられない。チェックリストのレベルは M. N よりも高く, 各項目においても上限に達しているものが増加している。しかし, これらの上限レベルは, 普通児においては就学時に到達しているものであり, 今後の評価は本チェックリスト以外のもので行う必要がある。知能検査は, M. N は IQ 17, H. T は IQ 29 であり, これらの結果からも特殊学級での指導は妥当であると言えよう。学校の指導形態はいずれも部分的に普通学級との交流を行っており, これらによる指導効果が認められている。今後, 対象児のレベルを考慮した交流教育は積極的に行われるべきであろう。

### (3)変容経過の検討と予測

次に, この1年間の対象児の変容経過を検討した上で, 今後の学校適応の予測を試みる。普通学

級在籍児においては問題となる領域に違いがあるにせよ、普通学級での適応に困難傾向が認められた。この傾向は前報でも指摘されており、本報告の結果をみると、より顕著になってきたと言えよう。T.M.においては障害要因に加えて、学校の指導方法に問題点があると言わざるを得ず、このような指導方法が変わらない限り改善は望めないであろう。K.Y.の学習面もまた、現状のように普通学級だけの指導では改善が期待できないであろう。今後も他児の学力の進歩に伴って相対的に遅れが顕著になることが予想される。M.S.は学習面よりも、対人関係を中心とした社会性の学習に問題がある。現在、情緒障害学級の教師や普通学級の担任の努力によって改善されてきている点もみられるが、母親を中心とした家庭内の相互作用の改善を児童相談所等の利用により、強力に進める必要がある。以上各対象児において指摘した問題点は前報の結果ともほぼ一致しており、より固定化することが予想される。

特殊学級在籍児においては、知能テストや各チェックリストの結果をみる限り現状を維持することが予想される。各対象児はチェックリストの上限に着実に近づいているが、変容速度は遅々としており、小学校卒業時においても大きな変化は望めないであろう。今後の中・高等教育を念頭に入れた実用的かつ効率的な課題の選択と指導方法の確立が望まれよう。具体的には機能的な表出言語の促進、自発的な行動のレパトリーの拡大等が必要である。また自閉症児に特徴的にみられる固執行動やパニックなどの対処にも十分留意する必要がある。以上のように、特殊学級在籍児においては、今後も個々の学習課題を確実に指導すれば遅々としながらも進歩がみられることが予想される。しかし、より早急に小学校卒業後の教育との連続性を考慮した指導が望まれる。

最後に本研究で用いた調査方法の検討を行う。本調査のデータは、主として学級担任や母親へのインタビューから得られたものである。補足的に学級訪問を行ったが、学級経営方針等の理由で平

常授業時の観察が不可能であったり、K.Y.児のように親の希望で学校訪問が不可能な症例もあった。したがって学級適応状況の評定は客観性に欠ける可能性がある。また、本考察において便宜的に普通学級群、特殊学級群に分けて検討を加えたが、各対象児が所属している学級は多様であり、複数の学級に所属している者もいる。したがって所属学級形態の単純な比較から適応状況を評価することは不可能である。以上のように、本研究の方法論上の問題点が指摘できるが、今後対象児の所属する学級形態や指導形態、及び指導内容等を可能な限り厳密に分析し、かつ観察者の評定基準の客観化をはかることによって、より信頼度の高い調査報告を行いたい。

## 文 献

- 1) 伊藤健次他(1981) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅲ(3)―自閉症状の消失した障害児について―心身障害学研究, 5(2), 29-42.
- 2) 伊藤健次他(1983) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅳ(3)―自閉症状の消失した障害児について―心身障害学研究, 7(1), 49-58.
- 3) 小林重雄他(1978) 自閉症児の指導過程に関する研究(1)―T-CLACの標準化―心身障害学研究, 2, 99-107.
- 4) 近藤明子他(1979) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅰ(4)―自閉症状の消失した障害児について―心身障害学研究, 3, 121-134.
- 5) 杉山雅彦他(1981) 自閉症児の言語行動に関する評価(1)―T-CLLACの作成と標準化―心身障害学研究, 4(1), 61-71.
- 6) 竹花正剛他(1980) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅱ(4)―自閉症状の消失した障害児について―心身障害学研究, 4(2), 63-81.

## Summary

### The Follow-up Studies Concerning School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms V (3)

—Handicapped Children with Autistic Symptoms Improved—

Tetsubumi Kato, Seigo Takehana, Kenji Itoh, Minoru Uchikoshi,  
Hiroko, Takehana, Kikuko Takasugi, Nahomi Hirata,  
Akiko Kondo and Shigeo Kobaybashi

We have reported about the school adjustment of 5 handicapped children with autistic symptoms had improved at the entrance of school (Kondo et al., 1979 : Takehana et al., 1980 ; Itoh et al., 1981 ; and Itoh et al., 1983).

In this 5th report, all the subjects were evaluated by the Tanaka-Binet Intelligence Test, T-CLAC, T-CLLAC, and interviewing records with the classroom teachers. And for three of the subjects, the Kyoken-Criterion-Referenced Test of arithmetic and Japanese was added.

Three of the subjects have been attending at the regular class and two at the special class. All the subjects were at the 5th grade.

The results were summarized as follows ;

(1) The subjects attending at the regular class have been shown the retardation of academic learning and the maladjustment in classrooms.

(2) The subjects attending at the special class have shown some improvement of basic learning skills and adjustment in the class. Those improvement was, however, difficult to generalize to non-training settings.

According to the results mentioned above, it should be advised that it would not be only needed to reorganized the teaching system in the subjects at the regular class, but to modify the teaching on considering continuity to education at the junior high school in the subjects at the special class.